九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

元稹の「代曲江老人百韻」詩について

二宮，俊博
椙山女子短期大学 ： 講師

https://doi.org/10.15017/9758

出版情報：中国文学論集. 11, pp.99-134, 1982-10-01. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

元稹の「代曲江老人百韻」詩について

二宮俊博

一

唐の玄宗の治世、年號でいえば開元（七一三―七四一）・天寶（七四二―七五五）の時代は、唐代三百年間に於いても、とりわけ物力の豐饒な、文明の爛熟した時代であり、詩の歴史の上からみても盛唐と稱せられ、數多くの詩人達が煌星の如く輩出した黄金期として、後世の人々の羨望の的となった時代である。しかしながら、その玄宗の榮華も、天寶十四載（七五五）十一月に突如として起った安祿山の擧兵により、一擧に壞え去り、唐王朝はここに建國以來未曾有の大混亂に卷き込まれていく。

この轉換期のさなか、亂離の苦しみをつぶさに嘗めた杜甫（七一二―七七〇）は、己が良心に從って誠實に生き拔き、變轉ただならぬ時代の證言者として、痛ましい現實の諸相を鋭く見据え、それを後世「詩史」と稱される數々の詩篇の中に刻み込んでいった。

その一方、開元・天寶の華やかな時代から安史の亂とそれに續く混亂の時代へと急轉直下せるあわただしい世情の轉變は、玄宗・楊貴妃を中心として、安祿山・李林甫・楊國忠ら、それぞれひとくせもふたくせもある人物がワキを固めて登場する歷史のドラマを形成している。そして、この玄宗・楊貴妃を中心とする人々の言行、就中、玄宗と楊貴妃との華やかなロマンスは、早くも次の所謂中唐・晚唐の時代には、鑑戒に資するために爲政者や歷史家達の分析批判の對象となり、[1]或いは巷間の興味津々たるゴシップの種を提供して、いやが上にも詩人・文人達の創作意欲を搔き立てることになるのである。[2]

かくて、そうした作品のうち、憲宗の元和元年（八〇六）に作られた白居易（七七二―八四六）の「長恨歌」と、元和十三年（八一八）に作られた元稹（七七九―八三一）の「連昌宮詞」との兩者は、この天寶の時事を歌った作品の雙璧として、從來しばしば併稱されて來た傑作である。例えば、宋の洪邁がその『容齋隨筆』卷十五において、

元微之・白居易は唐の元和・長慶の間に在りて名を齊しくす。其の天寶の時事を賦詠せる連昌宮詞・長恨歌は、皆な人口に膾炙され、之を讀む者をして情性蕩搖せしめ、身づから其の時に生まれ、親しく其の事を見るが如くして、殆んど未だ優劣を以て論ずること易からざるなり。

と述べていることなどは、その顯著な事例である。

但だ、その場合、白居易の「長恨歌」をめぐっては、從來その內容から看て、白居易の制作意圖ひいては作品の評價の仕方について、とかく議論が喧しいのに對して、元稹の「連昌宮詞」の場合は、

白樂天は長恨歌を作り、元微之は連昌宮詞を作る。皆な明皇の時事を紀すなり。予以爲らく、微之の作は樂天

の歌に過ぐと。白の歌は荒淫の語に止まり、終篇規正する所無し。元の詞は、乃ち微にして顯、其の荒縱の意、皆な考ふべし。卒章乃ち箴諷を忘れず、優と爲すなり。（張邦基『墨莊漫錄』卷六）

との見解があり、また前述の『容齋隨筆』にも、先に引用した文に引き續き、

然れども、長恨歌は明皇の貴妃を追愴せる始末を述ぶるに過ぎず、他に激揚する無し。連昌宮詞の監戒規諷の意有るに若かず。

と述べられているように、歷代の批評家達には、どちらかと言えば、「連昌宮詞」の方が、白居易の「長恨歌」に比べて一段と諷諭性に富む作品として評價されて來たようである。(3)

そして、そうした「連昌宮詞」評價は、今日においてもなお引き續いているように見受けられる。例えば、周祖謨氏の編著にかかる『隋唐五代文學史』では(4)、「連昌宮詞」を元稹の代表作の一つとして擧げ、その內容・構成に言及しながら、次のように記している。

詩の中で、元稹は連昌宮邊の老翁をかりて、連昌宮の興廢の過程を叙述し、そこに安史の亂前後の社會の變遷の情況を映し出している。連昌宮の盛衰は、大唐帝國の盛衰の一縮圖であり、唐が隆盛した理由、衰退した原因について、作者は老翁の口を藉りて自己の見解を述べているのである。元稹は、唐が繁榮した理由は、姚崇・宋璟が宰相となり、政治が正しく行なわれて天下が大いに治まったことにあるとし、その衰退した原因は、李林甫・楊國忠が「權を弄び」、そのため「廟謨顚倒」して政治が腐敗したことによると見做している。それ故、歷史事件の分析に續いて、詩人はその當時の爲政者に對して、「努力して廟謨兵を用ふるを休めよ」とい

う提案をしているのだ。

ここでも、元稹の「連昌宮詞」は高く評價され、その評價は諷諫性に着目してなされている。

ところで、この「連昌宮詞」の內容・構成については、陳寅格氏が其の著『元白詩箋證稿』において、白居易の「長恨歌」や「新樂府」からの影響を指摘している。すなわち陳氏の所說に據れば、

元微之の「連昌宮詞」は、實は深く白樂天・陳鴻の「長恨歌」及び「長恨歌傳」の影響を受けており、唐代小說の史才・詩筆・議論を融合して一體と成したものである。その篇首の一句及び篇末の結語二句は、主題を提示し、詩作の意圖を述べ、詩全體の議論を總括している。（中略）總じて之を言えば、「連昌宮詞」は微之が樂天の「長恨歌」の題材を取り、香山の「新樂府」のスタイルによって作り直した新しい作品である。(5)

ということになる。

しかしながら、陳寅格氏のこの指摘は、元稹に對する白居易からの影響關係を說くのに急なあまり、元稹自身が本來抱いていた開元・天寶時代に對する關心の有樣には全く觸れることなく終っており、その意味で元稹の主體性をやや無視した嫌いがあるように思われる。

なぜならば、元稹は、既に白居易の「長恨歌」や「新樂府」の制作に先立って、年僅かに十六歲の時、いち早く「曲江の老人に代はる百韻」という長篇の力作を完成しており、この詩は、たしかに表現の流暢さには缺けるものの、曲江邊の老人の口を藉り、開元・天寶の時代から安史の亂に至る經緯とその後の狀況について、これを端正な五言百韻にまとめ上げた作品に他ならないからである。

二

元稹の「曲江の老人に代はる百韻」詩は、その全文を掲げると、次のごとくである。(6)

1 何事花前泣　何事ぞ花前に泣く
2 曾逢舊日春　曾て舊日の春に逢へばなり
3 先皇初在鎬　先皇　初めて鎬に在り
4 賤子正游秦　賤子　正に秦に游ぶ
5 撥亂干戈後　亂を撥(おさ)む干戈の後
6 經文禮樂辰　文を經とす禮樂の辰(とき)
7 徽章懸象魏　徽章　象魏に懸り
8 貔虎畫騏驎　貔虎(ひこ)　騏驎(殿)に畫(えが)かる
9 光武休言戰　光武　言(ここ)に戰ひを休(や)め
10 唐堯念睦姻　唐堯　睦姻を念(おも)ふ
11 琳琅鋪柱礎　琳琅　柱礎に鋪(し)き
12 葛藟茂河濱　葛藟　河濱に茂る
13 尙齒惇耆艾　齒(よはひ)を尙びて耆艾に惇(あつ)く

14 搜材拔積薪　材を搜して積薪を拔く
15 裴王持藻鏡　裴（楷）王（戎）藻鏡を持し
16 姚宋斡陶鈞　姚（崇）宋（璟）陶鈞を斡らす
17 內史稱張敞　內史は張敞を稱し
18 蒼生借寇恂　蒼生は寇恂を借る
19 名卿唯講德　名卿　唯だ德を講じ
20 命士恥憂貧　命士　貧を憂ふるを恥づ
21 杞梓無遺用　杞梓に遺用無く
22 蒭蕘不忘詢　蒭蕘に詢るを忘れず
23 懸金收逸驥　金を懸けて逸驥を收め
24 鼓瑟薦嘉賓　瑟を鼓して嘉賓に薦む
25 羽翼皆隨鳳　羽翼皆な鳳に隨ひ
26 圭璋肯雜珉　圭璋肯へて珉を雜へんや
27 班行容濟濟　班行　容濟濟たり
28 文質道彬彬　文質　道彬彬たり
29 百度依皇極　百度　皇極に依り

30 千門闢紫宸　千門　紫宸に闢く
31 措刑非苟簡　刑を措くも苟簡に非ず
32 稽古蹈因循　古を稽へて因循を蹈む
33 書謬偏求伏　書の謬れるは偏く伏（生）に求め
34 詩亡遠聽申　詩の亡べるは遠く申（公）に聽く
35 雄推三虎賈　雄には三虎の賈を推し
36 秀擢八龍荀　秀には八龍の荀を擢す
37 海外恩方洽　海外　恩方に洽く
38 寰中敎不泯　寰中　敎へ泯びず
39 儒林精闃奧　儒林　闃奧に精しく
40 流品重清淳　流品　清淳を重んず
41 天淨三光麗　天淨くして三光麗しく
42 時和四序均　時和して四序均し
43 卑官休力役　卑官　力役を休め
44 蠲賦免艱辛　蠲賦　艱辛を免る
45 蠻貊同車軌　蠻貊　車軌を同じうし

元稹の「代曲江老人百韻」詩について（二宮俊博）

46 鄉原盡里仁　鄉原　盡く里仁たり
47 帝途高蕩蕩　帝途　高きこと蕩蕩たり
48 風俗厚闇闇　風俗　厚きこと闇闇たり
49 暇日耕耘足　暇日　耕耘足り
50 豐年雨露頻　豐年　雨露頻りなり
51 戎煙生不見　戎煙生ずること見えず
52 村竪老猶純　村竪老いて猶ほ純なり
53 耒耜勤千畝　耒耜　千畝を勤め
54 牲牢奉六禋　牲牢　六禋に奉ず
55 南郊禮天地　南郊に天地を禮し
56 東野闢原畝　東野に原畝を闢く
57 校獵求初吉　校獵は初吉を求め
58 先農卜上寅　先農は上寅をトす
59 萬方來合雜　萬方來りて合雜し
60 五色瑞輪囷　五色瑞は輪囷たり
61 池籞呈朱雁　池籞　朱雁を呈し

62 壇場得白鱗　壇場　白鱗を得
63 酹金光照耀　金を酹して光照耀し
64 奠璧綵璘玢　璧を奠して綵璘玢たり
65 掉蕩雲門發　掉蕩として雲門發す
66 蹁躚鷺羽振　蹁躚として鷺羽振ふ
67 集靈撞玉磬　集靈（殿）に玉磬を撞き
68 和鼓奏金錞　鼓に和して金錞を奏す
69 建簴崇牙盛　簴を建てて崇牙盛んに
70 銜鐘獸目嗔　鐘を銜みて獸目嗔る
71 總干形屹崒　總べし干は形屹崒たり
72 戛敔背嶙峋　戛ちし敔は背嶙峋たり
73 文物千官會　文物　千官會し
74 夷音九部陳　夷音　九部陳ぶ
75 魚龍華外戲　魚龍は華外の戲
76 歌舞洛中嬪　歌舞　洛中の嬪
77 佳節修酺禮　佳節　酺禮を修め

78 非時宴侍臣　非時　侍臣宴す
79 梨園明月夜　梨園　明月の夜
80 花萼艶陽晨　花萼（樓）　艶陽の晨
81 李杜詩篇敵　李（白）杜（甫）詩篇敵し
82 蘇張筆力匀　蘇（璉）張（說）筆力匀（ひと）し
83 樂章輕鮑照　樂章は鮑照を輕んじ
84 碑板笑顏竣　碑板は顏竣を笑ふ
85 泰嶽陪封禪　泰嶽　封禪に陪し
86 汾陰頌鬼神　汾陰　鬼神を頌（たた）ふ
87 星移逐西顧　星移りて西顧を逐ひ
88 風暖助東巡　風暖くして東巡を助く
89 浴德留湯谷　浴德　湯谷に留り
90 蒐畎過渭濱　蒐畎　渭濱を過る
91 沸天雷殷殷　天を沸して雷殷殷たり
92 匝地轂轔轔　地を匝（めぐ）りて轂轔（こしき）轔たり
93 沃土心愈熾　沃土　心愈（いよ）いよ熾（さか）んにして

94 豪家禮漸湮　豪家　禮漸やく湮ぶ
95 老農羞荷鍤　老農　鍤を荷ふを羞ぢ
96 貪賈學垂紳　貪賈　紳を垂るるを學ぶ
97 曲藝爭工巧　曲藝　工巧を爭ひ
98 雕機變組紃　雕機　組紃を變ず
99 青鳧連不解　青鳧は連なりて解けず
100 紅粟朽相因　紅粟は朽ちて相因る
101 山澤長萃貨　山澤長じて貨を萃くし
102 梯航競獻珍　梯航競ひて珍を獻ず
103 翠毛開越嶲　翠毛は越嶲を開き
104 龍眼弊甌閩　龍眼は甌閩を弊る
105 玉饌薪然蠟　玉饌　薪に蠟を然やし
106 椒房燭用銀　椒房　燭に銀を用ふ
107 銅山供橫賜　銅山　橫賜に供し
108 金屋貯宜嚬　金屋　宜嚬を貯ふ
109 班女恩移趙　班女　恩は趙に移り

110 思王賦感甄　思王　賦して甄を感ぜしむ
111 輝光隨顧步　輝光は顧步に隨ひ
112 生死屬搖脣　生死は搖脣に屬す
113 世族功勳久　世族は功勳久しく
114 王姬寵愛親　王姬は寵愛親し
115 街衢連甲第　街衢　甲第を連ね
116 冠蓋擁朱輪　冠蓋　朱輪を擁す
117 大道垂珠箔　大道　珠箔を垂れ
118 當壚踏錦茵　壚に當りて錦茵を踏む
119 軒車隘南陌　軒車　南陌に隘れ
120 鍾聲滿西鄰　鍾聲　西鄰に滿つ
121 出入張公子　出入するは張公子
122 嬌奢石季倫　嬌奢たり石季倫
123 鷄場潛介羽　鷄場　潛かに羽を介し
124 馬埒並揚塵　馬埒　並に塵を揚ぐ
125 韜袖誇狐腋　韜袖　狐腋を誇り

126 弓弦尙鹿臙　弓弦　鹿臙を尙ぶ
127 紫條牽白犬　紫條　白犬を牽き
128 繡韉被花駰　繡韉　花駰に被る
129 箭倒南山虎　箭は南山の虎を倒し
130 鷹擒東郭兎　鷹は東郭の兎を擒にす
131 翻身迎過鴈　身を翻して過鴈を迎へ
132 劈肘取廻鶻　肘を劈きて廻鶻を取る
133 竟蓄朱公產　竟に朱公の產を蓄へ
134 爭藏邴氏緡　爭って邴氏の緡を藏す
135 橋桃矜馬鶩　橋桃のごと馬鶩を矜り
136 倚頓數千犉　倚頓のごと千犉を數ふ
137 蘆鬪多中韭　蘆は多中の韭を鬪ひ
138 羹憐遠處蓴　羹は遠處の蓴を憐しむ
139 萬錢纔下筯　萬錢纔かに筯を下し
140 五酘未稱醇　五酘未だ醇と稱せず
141 曲水閑銷日　曲水　閑やかに日を銷し

元稹の「代曲江老人百韻」詩について（二宮俊博）

142 倡樓醉度旬　倡樓　醉ひて旬を度す
143 探丸依郭解　丸を探すは郭解に依り
144 投轄伴陳遵　轄を投じて陳遵に伴ふ
145 共謂長之泰　共に謂へらく長く泰に之くと
146 那知遽構屯　那ぞ知らん遽かに屯を構へるを
147 姦心興桀黠　姦心　桀黠を興し
148 凶醜比頑嚚　凶醜　頑嚚に比す
149 斗柄侵妖彗　斗柄　妖彗に侵され
150 天泉化逆鱗　天泉　逆鱗と化す
151 背恩欺乃祖　背恩　乃祖を欺き
152 連禍及吾民　連禍　吾民に及ぶ
153 禊貘當前路　禊貘　前路に當り
154 鯨鯢得要津　鯨鯢　要津を得たり
155 王師纔業業　王師纔めて業業たり
156 暴卒已營營　暴卒已に營營たり
157 雜虜同謀夏　雜虜同に夏を謀り

158 宗周蹔去豳　宗周蹔(しば)し豳を去る
159 陵園深暮景　陵園　暮景深く
160 霜露下秋旻　霜露　秋旻下る
161 鳳闕悲巢鵬　鳳闕　巢鵬を悲しみ
162 鵷行亂野麿　鵷行　野麿に亂さる
163 華林荒茂草　華林　茂草荒れ
164 寒竹碎貞筠　寒竹　貞筠碎かる
165 村落空垣壞　村落　空垣壞れ
166 城隍舊井堙　城隍　舊井堙(ふさ)がる
167 破船沉古渡　破船は古渡に沉み
168 戰鬼聚陰燐　戰鬼は陰燐に聚(あつま)る
169 振臂誰相應　臂を振ふも誰か相應ぜん
170 攢眉獨不伸　眉を攢(ひそ)めて獨り伸びず
171 毀容懷赤紱　容(かほ)を毀ちて赤紱を懷き
172 混跡載黃巾　跡を混じて黃巾を載す
173 木梗隨波蕩　木梗　波蕩に隨ひ

174 桃原斅隱淪　桃原　隱淪を斅ぶ
175 弟兄書信斷　弟兄　書信斷(たえ)
176 鷗鷺往來馴　鷗鷺　往來馴る
177 忽遇山光徹　忽ち山光の徹するに遇ひ
178 遙瞻海氣眞　遙かに海氣の眞なるを瞻(み)る
179 秘圖推廢王　秘圖　廢王を推し
180 後聖合經綸　後聖　經綸に合す
181 野杏渾休植　野杏　渾(す)べて植うるを休(や)め
182 幽蘭不復紉　幽蘭　復たびは紉(ひす)ばず
183 但驚心憤憤　但だ心の憤憤たるに驚くも
184 誰戀水粼粼　誰か水の粼粼たるを戀(と)はんや
185 盡室離深洞　盡室　深洞を離れ
186 輕橈盪小綸　輕橈　小綸を盪(うご)かす
187 殷勤題白石　殷勤に白石に題し
188 悵望出青蘋　悵望して青蘋より出づ
189 夢寐在平生　夢寐　平生に在るも

190 經過處所新　經過　所新に處る
191 阮郎迷里巷　阮郎は里巷に迷ふも
192 遼鶴記城闉　遼鶴は城闉を記ゆ
193 虛過休明代　虛しく休明の代を過し
194 旋爲朽病身　旋ち朽病の身と爲る
195 勞生常矻矻　生を勞して常に矻矻
196 語舊苦諄諄　舊を語りて苦だ諄諄たり
197 晩歲多衰柳　晩歲　衰柳多し
198 先秋媿大椿　先秋　大椿に媿づ
199 眼前少年客　眼前の少年の客
200 無復昔時人　復た昔時の人となる無れ

まず最初に、曲江の邊りで今を盛りと咲き誇る花を前にして、人知れず涙にかきくれる老人が登場する。何故泣いているのかといえば、曾ての華やかなりし青春の日々を憶い出してのことではあるが、それは單に過ぎ去りし青春への鄕愁が、眼前の花の姿に誘發されるばかりではない。この老人の青春は、玄宗の榮華とともに在ったが、安祿山の亂の勃發によって一轉して多くの苦勞を嘗めねばならなかった。それらのことどもが、今一時に思い返され、どうしても涙せずにはおられなかったのである。老人は作者（＝元稹）を前に、恰好の聞き手を得て馮かれた

ように滔々と昔語りを始める。

「先皇」卽ち玄宗が、中宗の皇后韋氏を討ち、積年にわたる政治の混迷を打破して卽位したのが先天元年（七一八）八月。翌先天二年七月には、とかく政治向きのことまで容喙する太平公主の不穩な動きに機先を制して、これに死を賜い、武則天より續いた女人支配を一掃して、所謂開元の治が幕をあけた。[7] あたかもこの時、老人は長安にやって來たのである。（以上第四句まで、導入部）

以下第九二句までは、玄宗の治世のすばらしさを叙述する。玄宗が卽位してより臣下に姚崇（六五一～七二一）・宋璟（六六三～七三七）という名宰相を得て、國の隅々まで教化が廣くゆきわたり、異民族を撫附し、文運も大いに隆盛したことを、典據のある語句を陳ねて述べる。謂わば、杜甫のいう「開元全盛の日」[8]を總括的に叙しているものと考えられる。（第五句～第九二句）

とはいえ、泰山での封禪の行事や汾陰での后土の祠りによって、その絶頂を極めた玄宗の權勢も、第九十三・九十四句の「沃土心愈（いよ）いよ熾（さか）んにして、豪家禮漸（やう）やく湮（ほろ）ぶ」という邊りからは、文明がしだいに爛熟の度を增し、太平に慣れ切った民人の間に奢侈の風が浸透していくなかで、だんだんと頽廢の影をきざして來るようになる。そして、そのような風潮の下、後宮では楊貴妃が天子の寵愛を誇り、世上ではその楊貴妃の力を背景とした楊氏一族が專横をほしいままにしていくのである。（第九十三句～第一四四句）

ここに至って、永遠に續くかと思われた太平の夢も、にわかに起った安祿山の亂のために破られ、老人の回想は、安史の亂とそれに伴う世上の荒廢せる狀況に話がうつり、老人自身の亂離の體驗、つまり、戰火を避けて山中

に身を隠したしだいが語られる（第一四五句～第一七六句）。

やがて、老人の隠れ住む山中にも、光復のきざしが現れ、復び都にもどることになるが（第一七七句～第一九二句）、最後は、老人が作者元稹に對して、己れの感慨「復た昔時の人となる無れ」という言葉を述べて結びとする（第一九三句～第二〇〇句）。

三

以上、元稹の「曲江の老人に代はる百韻」詩を掲げ、その梗概を述べたが、この詩において元稹は玄宗の治下、文運の隆盛せるさまを

李杜詩篇敵　李（白）杜（甫）詩篇敵し
蘇張筆力匀　蘇（頲）張（説）筆力匀（ひと）し
樂章輕鮑照　樂章は鮑照を輕んじ
碑板笑顔竣　碑板は顔竣を笑ふ

と詠じている。元稹が、當時の文運の隆盛をもたらしたこれらの人物のうち、詩人については、李白（七〇一～七六二）・杜甫に言及している點は、實に彼の鋭敏な批評眼を窺わせるに足るものである。なかでも、生前より赫々たる詩名につつまれていた李白に比べて、この當時必ずしも文學的評價の高くなかった杜甫に關しては、元稹がその文學の發掘者として最も功績のあった一人とされているけれども、[9] この「曲江の老人に代はる百韻」詩こそ、彼の

杜甫に言及せる最初の作品であった。

のみならず、そもそもこの詩の冒頭に、曲江のほとりで人知れず涙にかきくれる老人を登場させた手法自體、

少陵野老呑聲哭　少陵の野老聲を呑みて哭す
春日潛行曲江曲　春日潛行す曲江の曲

と始まる杜甫の「哀江頭」を想起させるに充分である。

なお、この「哀江頭」詩は、至德二載（七五七）、杜甫が安祿山の賊軍によって長安に拘禁されていた時の作であるが、またこれより先、天寶末には、杜甫に「麗人行」と題する作品があって、

三月三日天氣新　三月三日天氣新たなり
長安水邊麗人多　長安水邊麗人多し

と詠じ、上巳の日の曲江水邊における楊氏一族の傍若無人な酒宴のありさまを寫し出している。

だとすれば、元稹が、一老翁に開元・天寶の昔語りをさせる場所として、この曲江の地を選んだのは、昔日の榮華をしのぶには絶好の舞臺であったといえよう。

けれども、元稹のこの詩の展開・構成の面について言えば、實は他に彼に多大な影響を與えたとみられる作品が存在するのである。鈴木虎雄氏は、「唐の叙事詩」という論文の中で、次のような見解を披瀝されている。[10]

崔顥（開元二十一年の進士）[11]の出るに及んで「江畔老人愁」、「邯鄲宮人怨」、等の作がある。前者は現に百五歳の老人が六朝の末、梁陳二代に仕へ榮華を極めたが今は零落してゐるといふ感慨の物語りを叙してゐるし、後者は燕趙地方

の一佳人が宮中に仕へ寵愛を承けたが今は放たれて田里に歸り富める人に嫁してゐるといふ述懐談を記してゐる。此の二詩のことは前人も言及せるもの無きやうであるが自分は是は確に白居易元稹などの叙事詩の由て來る源泉と謂ってもよいものだと信じてゐる。

鈴木氏は、ここで崔顥（六九四？～七五八？）[12]の「江畔老人愁」詩及び「邯鄲宮人怨」詩が、白居易・元稹の叙事詩（この場合、白居易の「琵琶行」、元稹の「連昌宮詞」を指すものと考えられる）の先蹤をなす作品であることを初めて指摘されたが、今、「邯鄲宮人怨」についてはさておき、「江畔老人愁」詩が、たしかに元稹の「連昌宮詞」ひいては、ここに取り上げている「曲江の老人に代はる百韻」詩と極めて類似した構成・内容をもっていることは、更めて注意すべきことのように思われる。因みに崔顥の「江畔老人愁」詩を掲げると左のごとくである。

1 江南年少十八九　江南の年少十八九
2 乘舟欲渡青溪口　舟に乘りて渡らんと欲す青溪の口
3 青溪口邊一老翁　青溪口邊の一老翁
4 鬢眉皓白已衰朽　鬢眉は皓白にして已に衰朽す
5 自言家代仕梁陳　自ら言ふ　家は代よ梁陳に仕へ
6 垂朱拖紫三十人　朱を垂れ紫を拖くは三十人
7 兩朝出將復入相　兩朝將を出だし復た相を入れ
8 五世疊鼓乘朱輪　五世鼓を疊して朱輪に乘る

元稹の「代曲江老人百韻」詩について（二宮俊博）

9 父兄三葉皆尙主　父兄三葉皆な主を尙(やと)り
10 子女四代爲妃嬪　子女四代妃嬪と爲る
11 南山賜田接御苑　南山の賜田は御苑に接し
12 北宮甲第連紫宸　北宮の甲第は紫宸に連なる
13 直言榮華未休歇　直(た)だ言ふ榮華未だ休歇せずと
14 不覺山崩海將竭　覺えず山崩れ海將に竭(つ)きんとするを
15 兵戈亂入建康城　兵戈は亂れて建康城に入り
16 煙火連燒未央闕　煙火は連なりて未央闕を燒く
17 衣冠士子陷鋒刃　衣冠の士子は鋒刃に陷(お)ち
18 良將名臣盡埋沒　良將名臣は盡(ことごと)く埋沒す
19 山川改易失市朝　山川改易して市朝を失し
20 衢路縱橫塡白骨　衢路縱橫して白骨を塡(うづ)む
21 老人此時尙少年　老人此の時尙ほ少年
22 脫身走得投海邊　身を脫し走りて海邊に投づるを得たり
23 罷兵歲餘未敢出　兵(いくさ)を罷めて歲餘なるに未だ敢へて出でず
24 去鄕三載方來旋　鄕を去ること三載にして方(はじ)めて來り旋(かへ)る

25 蓬蒿忘卻五城宅　蓬蒿に五城の宅を忘卻し
26 草木不識青谿田　草木に青谿の田を識らず
27 雖然得歸到鄉土　歸り得て鄉土に到ると雖然ども
28 零丁貧賤長辛苦　零丁貧賤にして長に辛苦す
29 采樵屢入歷陽山　樵を采り屢しば入る歷陽山
30 刈稻常過新林浦　稻を刈り常に過る新林浦
31 少年欲知老人歲　少年老人の歲を知らんと欲するも
32 豈知今年一百五　豈に知らんや今年一百五なるを
33 君今少壯我已衰　君は今少壯なるも我已に衰ふ
34 我昔少年君不睹　我も昔少年なるを君は睹ず
35 人生貴賤各有時　人生の貴賤各おの時有り
36 莫見羸老相輕欺　羸れ老いたるを見て相輕欺する莫れ
37 感君相問爲君說　君が相問ふに感じて君が爲に說く
38 說罷不覺令人悲　說き罷れば覺えず人を令て悲しましむ

七言歌行體でつづられるこの詩は、次のような構成になっている。すなわち、最初に作者と覺しき十八九の少年が梁・陳の故都建康に程近い青溪（江蘇省南京市の東北）の口にて一人の老人と出遇う（第一句～第二句）。老人は

昔語りを始めるが、まず梁・陳の二代にわたって老人の一族が隆盛を極めたことを述べ（第三句～第十二句）、ついで、豫期だにしなかった兵亂が興って陳が滅亡し（第十三句～第二十句）、この時まだ少年であった老人は戰火を避けて海邊に逃れ、兵火が鎭まってから三年ぶりに故郷に歸って來た（第二十一句～第二十六句）。しかし、鄕里に歸ったものの今ではすっかり落ちぶれてしまい、老人も齡百五十[13]を數えるようになっていたという（第二十七句～三十四句）。そして最後は、この老人が聞き手の少年に訓誡を垂れて結びとする（第三十五句～三十八句）。

これを元稹の「曲江の老人に代はる百韻」詩と比較してみると、その對應關係は正に一目瞭然である。その場合、崔顥が梁・陳から隋・唐へという一つの轉換期を軸に、榮華の極から一轉して沒落していった或る老人の個人的な閱歷を中心に描き出しているのに對して、元稹の方は、曲江邊の老翁を登場させてはいるけれども、少なくとも前半は、單に彼の個人的な感慨を叙情的に述べるためだけに開元・天寶という時代背景を借りたというよりは、むしろ時代の轉變せる局面を前面に打ち出して、これを描寫することに力點を置いているように思われる。もっとも、安祿山の亂が勃發して以降の叙述は、崔顥の場合と同樣、老人の個人的な身の處し方が中心に詠ぜられており、最後もやはり、老人の詠嘆的な感慨をもって結ばれている。

この間の事情は、元稹後年の「連昌宮詞」にあっても同樣である。ただ、「連昌宮詞」が、崔顥の「江畔老人愁」詩や元稹の前作「曲江の老人に代はる百韻」詩と大きく異っているのは、その結末で老人の感慨を述べたくだりが、

89老翁此意深望幸　　老翁の此の意深く幸を望む

90 努力廟謨休用兵　努力して廟謨兵を用ふるを休めよ

と結ばれており、時の爲政者に對して眞正面から政治的意見が吐かれている點にある。その意味で、「連昌宮詞」は、前作の「曲江の老人に代はる百韻」詩に比べて明確な主張を持った作品だと言うことができる。そして、表現技法の上でも、「連昌宮詞」は、

65 我聞此語心骨悲　我此の語を聞きて心骨悲しむ
66 太平誰致亂者誰　太平は誰か致さん亂す者は誰ぞ

という作者の問いかけに、老翁が答えて、

69 姚崇宋璟作相公　姚崇・宋璟　相公と作り
70 勸諫上皇言語切　上皇を勸諫して言語切なり
71 燮理陰陽禾黍豐　陰陽を燮理して禾黍豐かにして
72 調和中外無兵戎　中外を調和して兵戎無し
73 長官清平太守好　長官清平にして太守好く
74 揀選皆言由相公　揀選は皆な言ふ相公に由ると

と詠じて、太平を招來した功績者として宰相姚崇・宋璟の名を擧げ、彼らによってもたらされた開元の治を讃えた後、

75 開元之末姚崇死　開元の末　姚崇死し

76 朝廷漸漸由妃子　朝廷は漸い漸いに妃子に由る
77 祿山宮中養作兒　祿山は宮中に養はれて兒と作り
78 虢國門前鬧如市　虢國の門前　鬧しきこと市の如し
79 弄權宰相不記名　權を弄せし宰相は名を記えず
80 依稀憶得楊與李　依稀として楊（國忠）と李（林甫）とを憶え得たり
81 廟謨顚倒四海搖　廟謨顚倒して四海搖ぎ
82 五十年來作瘡痏　五十年來　瘡痏と作る

と詠じ、今度は天寶年間の太平を亂した張本人の名を擧げ、前段とは好對照をなして語られている。「連昌宮詞」においては、このような對比の下に、開元と天寶時代との政治の得失が歷然と浮彫りにされるように表現が工夫され、それが詩作の意圖を明瞭に際立たせる結果となっているのである。このような對比的表現は、或いは、白居易の「新豐折臂翁」詩に、

君不聞開元宰相宋開府　君聞かずや　開元の宰相宋開府
不賞邊功防黷武　邊功を賞せずして武を黷すを防ぐを
又不聞天寶宰相楊國忠　又聞かずや　天寶の宰相楊國忠
欲求恩幸立邊功　恩幸を求めんと欲して邊功を立つるを

とあるような對比的叙述方法から影響を受けたものであるかも知れない。

尙、「曲江の老人に代はる百韻」詩並びに「連昌宮詞」が、いづれも、それぞれ曲江邊の老人か、もしくは連昌宮邊の老翁の口を藉りて、開元・天寶の時事を描き出しているのは、太だ興味深い。因みに、元稹と同時代の、永貞元年（八〇五）の進士である陳鴻の「東城老父傳」[14]や、白居易の「新豐折臂翁」詩、更には大中三年（八四九）乃至五年（八五一）頃に作られた鄭嵎の「津陽門詩」等、そのいづれもが、元稹の作品と同樣、開元・天寶の時代を生き拔いた老人を登場させている。恐らく元稹や白居易がこれらの詩を作った貞元（七八五～八〇四）元和（八〇六～八二〇）年間には、まだまだ開元・天寶の時代から安史の亂を體驗して生き殘っている老人が小數ながらも存在したのであろう。それ故、白居易も、江州（江西省九江市）の地で「江州にて天寶の樂叟に遇ふ」詩（元和十一～十三年作）を作っているわけであるが、しかしながら、實際上そういうことがあったにしろ、元稹の「曲江の老人に代はる百韻」詩などは、むしろ崔顥の「江畔老人愁」詩との深い關連から見て、詩中に登場する老人を必ずしも實在の人物と見做す必要はないように思われる。[15]

四

これまで、元稹十六歲の時の作である「曲江の老人に代はる百韻」詩を取り上げその內容の梗概を述べ、ついでこの作品が、崔顥の「江畔老人愁」詩の構成を借り、更に杜甫の「哀江頭」、「麗人行」等の影響の下に作られたことを論じて來たが、次に元稹が如何なる理由で、このような五言百韻の大作に手を染めるに到ったのか、その點について少し考えてみたい。

元稹十六歲と言えば、それは德宗の貞元十年（七九四）に當たる。この前年の貞元九年には、元稹は明經科に及第している。この當時、明經科が進士科ほどには重視されていなかったとはいえ、[14] 元稹は、とにかく官界進出への第一關門を突破して意氣軒昂たるものがあったに違いない。しかも、まだ十五歲、僅かに志學の時にしてである。そのためか、元稹は、この頃のことを後に幾度も繰り返し回想している。

元和十年（八一五）、左遷先の通州（四川省達縣）で、元稹は彼の文學的自叙傳とも言うべき「詩を叙して樂天に寄するの書」を書き上げたが、その中で、彼は九歲で詩を作ることを學び始め、「年十五六にして粗（あらま）し聲病を知っ」たと述べている。又、長慶二年（八三二）六月、元稹が宰相の地位から一轉して同州（陝西省大荔縣）刺史に出された時の上申書「同州刺史、上に謝するの表」において、「十有五にして明經出身を得、是（これ）より苦心して文を爲（つく）り、夙夜强學す」と述懷しているのも、この頃のことを回想してのことであった。

更に、彼が浙東觀察史（浙江省紹興市）の任にあった長慶四年（八三四）の「鄭從事の四年九月望海亭に宴するに酬ゆ、舊韻を次用す」と題する詩においても、この若々しかった頃の意氣込みを回顧して、

憶年十五學構厦　　憶ふ年十五にして構厦を學び
有意蓋覆天下窮　　天下の窮を蓋覆せんと意（おも）ふ有り

と、誇らし氣に詠じている。元稹の尊敬する杜甫でさえも、十五歲の頃はまだ「憶ふ年十五にして心は尙ほ孩（こども）なり健なること黃犢の如く走りて復た來る」（「百憂集行」）であったのとは違い、「俺は早くも十五の歲で、廣い屋根のある屋敷を建てて、世の中の貧乏人を蓋ってやろうという意欲があったぞ」と、ここで元稹は詠じているが、これ

又、杜甫の「茅屋　秋風の破る所と爲る歌」の一節「安にか廣厦千萬間を得て、天下の寒士を大庇して俱に歡ばせん」の句に據って、自分が若年の頃抱いていた經世の志をなつかしく振り返りながら述べているわけである。このように考えると、確かに「曲江の老人に代はる百韻」詩を作ったこの時期は、その後、元稹が元和年間に李紳（七七二～八四六）や白居易と共に新樂府運動に挺身する時期を第二段階とするならば、彼の關心が社會的な事象に向って開かれた謂わば第一段階、つまり士人としての自覺の時であったと見做してよいであろう。

では、十五六歳頃の元稹の眼には、當時の世情はどのようなものとして映っていたのか。

時に貞元十年已後、德宗皇帝春秋高く、理務人に因り、最も文法の吏を欲せず、天下に罪過を生ず。外閫の節將は、動もすれば十餘年朝覲を許されず。其の地に死して易らざる者十に八九。而して又た將豪にして卒愎るの處は、喪に因って衆を負み、横ままに相賊殺して、變を告ぐること駱驛たり。使者迭ひに窺ひ、旋ち狀を以て天子に聞して曰く、某色の將某は能く亂を遏め、亂衆寧附す。願はくば帥と爲さんと。名は衆情の爲にするも、其の實は逼詐なり。因って之を可とする者十に八九、前置の介倅の緣に因って交授せらるる者も亦た十に四五なり。是に由りて諸侯の敢へて自ら旨意を爲し、兒孩を羅列して以て自ら固める者有り。變夷を開導して以て自ら重しとする者有り。省寺の符篆几閣を固め、甚しき者は詔旨を礙り、一境を視ること一室の如くす。其の下を刑殺すること、啻に僕畜のみならず。剝奪を厚加して名づけて進奉と爲す。其の實、之を貢入するは、數百に一なり。京城の中、亭第邸店は曲巷を以て斷じ、侯甸の內、水陸の腴沃なるは、鄕里を以て計る。其の餘、奴婢資財、生生の備と之を稱す、朝廷の大臣は謹愼して、言はざるを以て朴雅と爲し、時に進見する

者は一二に過ぎず。親信・直臣・義士は往往にして抑塞せらる。禁省の間、時に或いは隕墜せるを繕完す。豪家・大帥は聲に乘じて相扇り、老佛に延入して、土木の妖娥、習俗恠しまず。上は有司をして宮闈中の小碎の須べからく求むべきを備へしむるを欲せざるも、往往にして弊帛を持して以て餅餌に易ふ。吏は其の端に緣り、百貨を剽奪して、勢ひ禁ずべからず。

これは、先に引用した「詩を叙して樂天に寄するの書」中に描かれている、元稹十六歳即ち貞元十年頃の社會狀況である。年老いた德宗は政治に對する情熱を失い、自ら直接政務を執らず、全く他人任せにしていたが爲に、世の中にいろいろな弊害が噴出して來た。そうした惡弊は、一口で言うならば、地方に在って中央政府の意向を無視して半獨立的な權力を握っていた節度使の橫暴、朝廷に貢物を奉ると稱して都鄙の民人に苛斂誅求を加えた「進奉」、帝都における宮室や豪家・將軍達の屋敷の造營、更には道觀・佛寺の大規模な土木工事、果ては、宮中御用達という名の下に强制的に物資を調達する「宮市」制度等に因ってもたらされたものであった。

元稹のこの書簡に列擧された社會的諸問題は、實はこの手紙が書かれる以前、憲宗の下で白居易が、その「新樂府」五十首の中において積極的に諷諫すべき對象として取り上げ、これを指彈し、廣く時の世道人心に訴えたものであるが、[19] 貞元十年當時の元稹は、このような亂脈を極める社會狀況に齒軋しながらも、未だ年若く、且つ政界に入って自らの手でこれを改革できるような地位や身分に達していなかったが故に、ひたすら勉學に打ち込むより他になかった。けれども彼は、

獨り書傳中に初めて理亂の萌漸せるを習ひ、心體悸震して、活くべからざるが若し。思ひて之を發せんとする

こと久し。（「叙詩寄樂天書」）

書籍中の記述から治亂興亡のきざしを鋭く讀み取り、かくて現實の狀況に思いを馳せた時、身も心もわなわなと震え出すほどの深い戰慄を覺えたのである。

とすれば、「曲江の老人に代はる百韻」詩において、玄宗の卽位から開元・天寶を經て安史の亂に至る經緯を餘す所なく傳えようとした試みは、元稹にこうした如何にも青年らしいみずみずしい正義感があったればこそ、可能になったのではなかろうか。

因みに、元稹は、「詩を叙して樂天に寄するの書」中で、自らの作品を「古諷」・「樂諷」・「古體」・「新題樂府」・「律詩」（七言及び五言）・「律諷」・「悼亡」・「艷詩」（今體及び古體）の十體に分類しているけれども、恐らく本來、「曲江の老人に代はる百韻」詩は、そのうち、

聲勢沿順にして屬對隱切なる者を律詩と爲し、仍ほ七言・五言を以て兩體と爲す。其の中、稍や寄興を存し諷と流を爲す者を律諷と爲す。（「叙詩寄樂天書」）

と述べる「律諷」に妥當する作品ではなかったろうか。鄭振鐸は『插圖本文學史』の中で、

元稹はまた「代曲江老人百韻」、「茅舍」、「賽神」、「青雲驛」、「陽城驛」および「連昌宮辭」等を書いたが、皆な諷勸の意が有る。

と述べ、この「曲江の老人に代はる百韻」詩に「諷諫」の意圖があることを認めているが、表現效果の上からして、「連昌宮詞」ほど、それが明瞭に感じられなくとも、上述のごとく作品の成立背景を勘案した場合、恐らく元

稹は、この作品にこうした「諷諫」の意圖を込めていたと思われる。

しかしながら、單に正義感のみでこのような百韻にわたる大作が作れるものではなく、詩人が新たな試みをなそうとする際には、必ず前代の偉大な詩人との邂逅がなければ、文字は表現として定着しないだろう。その意味で、この時期の元稹が、前述のごとく杜甫の文に出會っていることは、「曲江の老人に代はる百韻」詩を作る上で、しかも五言排律の形式を採用した點において、決定的な作用を及ぼしたに違いない。同じく、「詩を叙して樂天に寄するの書」で、

又之を久しくして、杜甫の詩數百首を得、其の浩蕩たる津涯の處處に臻到するを愛す。始めて沈（佺期）・宋之問）の寄興を存せざるを病み、而して（陳）子昂の未だ傍備せざるを訝る。

とも述べており、これをみてもわかるように、元稹は杜甫の詩を熟讀することによって、詩とはかくあるべきだという信念が深まり、文學上の開眼が出來たと云えよう。

そして、社會的關心の面もさることながら、元稹が、杜甫に壓倒され驚嘆したのは、彼が元和八年（八一三）に作った「唐の故工部員外郎杜君墓係銘并びに序」に、

終始を鋪陳し、聲韻を排比して、或いは千言、次は猶ほ數百、辭氣豪邁に而て風調清深、屬對律切に而て凡近を脱棄せり。

と述べるような、「秋日夔府詠懷一百韻」詩に代表される杜甫の長篇排律作家としての側面にあったろう。それ故、元稹は開元・天寶の時事を主題として扱いつつ、その構成・展開の面に多大の影響を與えたとみられる崔顥の「江

畔老人愁」詩のような七言歌行體の形式を採らず、百韻にわたる五言排律によって「曲江の老人に代はる百韻」という一大巨篇をまとめあげたのだろう。[19]

五

従來、元稹の「連昌宮詞」は、白居易の「長恨歌」と並んで開元・天寶の時事を詠じた作品の雙璧とされながらも、その一方で、この「連昌宮詞」の先蹤作品たる「曲江の老人に代はる百韻」詩が論じられたことはほとんどなかった。作品の完成度という見地からすれば、たしかに後者は遠く前者に及ばないものがあるかも知れない。けれども、開元・天寶の時代から安史の亂に至るまでの時代相を總括的に取り上げ、それを詩作品の中に織り込んでいく試みは、その時代を生き抜き亂離の體驗を數々の作品に殘した杜甫を除いては、同じく安史の亂を體驗した李白、高適（七〇六～七六五）、劉長卿（七一〇？～七八五？）等の詩人の作品に混亂した社會の樣子がごく一部詠ぜられることはあっても、[20]元稹が年僅かに十六歳にして「曲江の老人に代はる百韻」詩を作りあげるまでは、それ自體を正面から取り上げなかったか、さもなくば取り上げることの出來なかったものなのである。

例えば、玄宗の侍從武官として仕えた經歴を持つ韋應物（七三六～？）には、「溫泉行」、「驪山行」等の作品が殘されているが、これらの作品の根柢に流れているのは、單に過ぎ去りし玄宗朝への甘美な思い出に過ぎないように見受けられるし、もとより開元・天寶時代を總體化し客觀化して批判的に之を叙述するといった風のものではない。[21]

更に言えば、一百韻にわたる長篇の排律形式も、これを杜甫が開拓して以降、元稹のこの詩に至るまで、ついに全く試みられることはなかった。これらの事實を考えあわせると、元稹十六歳の時の「曲江の老人に代はる百韻」詩は、その後の名作「連昌宮詞」や、鄭嵎の「津陽門詩」の先驅をなした作品というにとどまらず、もっと積極的な文學史的評價が試みられて然るべきだと思われる。

註

（1）元和年間、朝廷に於いては、憲宗が時の宰相にしばしば開元・天寶時代の政治の得失について、之を質している。このことは、『李相國論事集』卷五、上言開元天寶事の條、及び『舊唐書』卷一百五十九崔群傳等に見える。

（2）唐人の詩に、開元・天寶の時事、とりわけ玄宗・楊貴妃の事を詠じた作品が多くみられることについて、陳寅格氏は『元白詩箋證稿』（一九七八、上海古籍出版社重印）第一章、長恨歌の條で、「唐人竟以太眞遺事爲一通常練習詩文之題目、此觀於唐人詩文集即可瞭然」と指摘しているが、これは、おおむね元和以後のことに屬するようである。

（3）歷代の「長恨歌」並びに「連昌宮詞」の評價をめぐっては、近藤春雄氏の『長恨歌・琵琶行の研究』（一九八一、明治書院刊）二一頁～二八頁、及び前川幸雄氏「『連昌宮詞』之評價」（一九七二、福井工業高專研究紀要人文・社會科學第五號）を參照。但し、「長恨歌」と「連昌宮詞」とを並置し、規諫の意の有無强弱によって之に優劣をつける從來の評價の仕方については、當然批判がある。この點は、竹村則行氏「吳偉業『永和宮詞』における白居易『長恨歌』（および元稹『連昌宮詞』）の受容」（一九八二、德島大学教養部紀要〈人文・社會科學〉第十七卷）に指摘されている。

（4）一九五八、福建人民出版社刊。

（5）前掲書、第三章、連昌宮詞の條による。又、同書一一頁にも、同樣の見解が述べられている。

（6）テキストは、全唐詩に據り、適宜諸本を參照した。又、後に文章を引く場合は全唐文に據り、これも諸本を參照した。尙、テキストについては、花房英樹氏編の『元稹研究』（一九七七、彙文堂刊）に詳しい。更に、詩文の制作年代については、同書と卞孝萱氏の『元稹年譜』（一九八〇、齊魯書社刊）とを參看した。

（7）この間の事情は、吉川幸次郎氏『杜甫私記』（一九八

○、筑摩書房刊）先天元年の條に詳しい。

（8）杜甫、「憶昔」詩。

（9）黒川洋一氏「中唐より北宋末に至る杜甫の發見について」（一九七七、創文社刊『杜甫の研究』所收）参照。

（10）鈴木虎雄氏『支那文學研究』（大正十四年、弘文堂刊）一七七頁。

（11）崔顥の進士及第は、開元十一年である。開元二十一年とあるのは、恐らく誤植であろう。

（12）崔顥の生卒年については、今しばらく譚優學氏『唐詩人行年考』（一九八一、四川人民出版社刊）の説に從う。

（13）第三十二句の「今年一百五」を鈴木氏は、「百五歳」と解釋されているが、ここでは、「百五十歳」とするのが正しいように思われる。譚優學氏前掲書参照。

（14）「東城老父傳」の作者を陳鴻祖とし、陳鴻とは別人であると見做す説もあるが、ここでは、近藤春雄氏並びに王夢鷗氏の見解に從う。近藤春雄氏『唐代小説の研究』（一九七八、笠間書院刊）四一〇頁～四一七頁、また、王夢鷗氏『唐代小説研究四集』（一九七八、藝文印書館刊）所收「東城老父傳作者考辨」参照。

（15）因みに言えば、崔顥の「江畔老人愁」詩に限らず唐詩の中には、劉希夷の「洛川懐古」詩、張謂の「代北州老人答」詩等、老人に已れの體驗を語らせて、それに對する作者の感慨を以て最後を結ぶといった構成を持つ作品が存することも勘案する必要があろう。王夢鷗氏前掲書参照。

（16）史實には合わないが、康駢の『劇談錄』卷六に元稹が當時詩名の高かった李賀のもとを訪れた際、明經出身の故に馬鹿にされたという逸話がある。

（17）白居易の「新製布裘」詩も、杜甫のこの詩に基づいている。

（18）例えば、白居易の「新樂府」五十首のうち、「兩朱閣」詩は「佛寺の寖やく多きを刺しる」ことをテーマとしたものであるし、「賣炭翁」詩は、「宮市に苦しむ」民人の爲に、また「杏爲梁」詩は「居處の奢るを刺しる」爲に作られている。

（19）元稹が七言歌行體でうたってもおかしくない内容を五言排律で詠じてみたのは、そこに彼の新機軸を打ち出そうとした意欲があったろうし、更には、自分の並々ならぬ才能を誇示する気持もあったであろう。ただし、後の「連昌宮詞」が七言で、作られているのは、陳寅格氏のいう「新樂府」や「長恨歌」からの影響であろう。

(20) 李白の「經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰」詩、高適の「酬裴員外以詩代書」詩、劉長卿の「至德三年春正月時謬蒙差攝海鹽令聞王師收二京因書事寄上浙西節度李侍郎中丞行營五十韻」詩等。

(21) このことは、深澤一幸氏「韋應物の歌行」(一九七四、中國文學報第二十四册)に言及されている。

(付記) この小稿は、一九八一年十二月十二日、相山女學園大學で行なわれた第十二回東海中國學談話會での研究發表をまとめたものである。(一九八二、七・二七)